

地域のネットワーク形成

木下 久美子

(高山赤十字病院図書室)

近畿病院図書室協議会の設立15周年おめでとうございます。現在の協議会に発展させるまでには、幹事を始めとする皆様の大変なご苦労があったことと思います。

当院は中部地方にあります。近隣に病院図書室の集まりがないことから、この近畿病院図書室協議会に入会いたしました。以来11年間、会員、特に近畿地区の会員の皆さんが利用者によりよい情報を提供するために研鑽を重ね、自分の図書室にない文献を提供し合い、情報交換している姿を目にして、中部地区にもこのような会ができればと願っていました。そのような中で、平成元年10月に当会の研修会を名古屋で開催していただけたことは大変嬉しい出来事でした。中部地区にも多くの病院図書室があり担当者がいること、図書室に関心を寄せている病院があることを実際に知ることができたのは大きな収穫でした。しかし、初めての研修会でもあり、参加者に図書室間のネットワークの必要性、重要性が十分には伝わらなかったのが残念でした。といいますのは、参加した病院の多くがこの協議会活動に賛同して入会してくるのを期待していたのですが、現在のところ新入会員がまだ無いからです。病院図書室の充実を考える時、図書室間の連携は不可欠であり、近い将来にはどのような形であれ、担当者の情報交換の場が生まれることを期待しています。

今後、近畿病院図書室協議会が近畿以外の多くの図書室を受け入れて組織を拡大していくのか、また今しばらくは他の地区の動きを見守るのか、私には分かりません。しかし、いずれにしてもこれまで15年間培ってきた組織運営の力を他地区でのネットワーク形成のために活かされることを、また全国の病院図書室の充実、発展のためにも活動されることを願っています。

出合いの大切さ

岡橋 郁子

(社保広島市民病院図書室)

協議会設立15周年おめでとうございます。

1976年11月、私は模範的病院図書室を見学するために東京へ出張しました。当時、当院では手狭な図書室から本が溢れ、また司書の業務も医局秘書兼務ということもあって無秩序に膨れ上がり、混乱状態にありました。それで、その打開策を求めて上京したわけです。

先ず、聖路加国際病院医学図書室を訪ねました。そこで足立氏に出会ったのです。彼女から近畿に「協議会」が結成されたこと、自分達も関東を中心にして「病図研」を結成することを知らされました。

このことは、正に私が渴望していた打開策そのものでした。早速両会に参加しました。会への参加は同じ仕事をする仲間との出合い、継続的な研修・見学への参加、幅広い情報交換等好機を与えてくれました。今、当図書室の発展を振り返ると、やはりこの出合いが大きな節目になっていることを確信します。1978年新図書室完成を機に、会で得たことを種々展開してまいりました。会入会以前の暗中模索9年間に比してどんなに能率的であったか、言うまでもないことです。特に協議会刊行の「医学資料の整理と利用－病院図書室マニュアル」「年次統計調査報告書」で業務の標準化が計られ、管理者の理解を得るのに大いに役だっております。

さて、当地域に病院図書室を含むネットワークを作ろうと1982年4月に協議会主催、日本医学図書館協会中四国部会後援で中国・四国地区病院図書室研修会が開催されました。予想以上に多数の参加を得て、川崎医大の湊氏は「今、種が蒔かれた。」とネットワーク形成のスタートを宣言されました。しかし、その種子は数年を経た今も一向に芽をふかないままであります。そして何も協力できないでいる自分の無力をいやが上にも知らされております。

協議会は15年を経、益々巨大な大木へと着実に

発展しております。これも役員各位のご努力の賜物と感謝いたします。

この8年間で振り返って

徳田 雅子

(大阪府立母子センター図書室)

「病院図書室に司書は必要か?」、私が母子センターに初めて関わりを持った時に最初に医師から質問されたのがこの言葉でした。当時の私は、学校図書館司書でしたから「病院」と「図書室」のイメージがつながらなくて返答に困ったものです。

その半年後に母子センターの図書室で働くことになったのですが、ここで与えられた最初の課題が「キンビョウキョウに入会すれば文献サービスを受けられると聞いたので入会したい」というものでした。その会について手がかりが何もありませんでしたので、桃山学院司書講習事務室を通じて大阪赤十字病院図書室を紹介していただき、その司書の方に案内されて住友病院医学図書部を訪問しました。これが病図協との最初の関わりであり、住友病院で見聞きした病院図書室の概要がその後の母子センター図書室の目標となったわけのです。

病図協加盟後は研修会には欠かさず出席し、そこで入手したノウハウは当図書室なりに加工し、実践させていただいています。その中で一番印象に残っているのが故朴木貞子さんの「作業に必要な時間と経費を数値化し、記録することが大切だ」という言葉でした。新人の私には、それが何故なのかよくわかりませんでした。それから数年後、学院図書室との兼務やオンライン検索の導入などで業務量が増え、未整理資料が山積みとなっていく日々の中でやっとあの言葉が理解できました。そして1988年11月、埼玉県立こども病院の司書の方が当室を訪問されたのをきっかけに、作業時間を綿密に計算し、増員をお願いするため上司に日参し、ようやく理解を得ることができました。

「忙しい」の言葉だけでなく、数値がものをいったのだと思います。はじめの問いかけから8年、今なら迷うことなく「病院図書室に司書は必要です」と答えられますし、さらに「病院図書室には病図協の協力援助が絶対に必要不可欠です」と言えるようになったと思います。

今後、協議会加盟機関は単に文献サービスを受受するだけでなく、病図協の事業にもっと主体的に参加して、自館を含めた全国的な病院図書室のレベルアップに力を注ぐべきだと考えます。

事例発表を行って

— 滋賀の市立病院図書室 —

吉川 信子

(市立長浜病院図書室)

「協議会設立15周年おめでとうございます。」と一言で済ましてしまうのが申し訳ないほど役員の皆様方には大変な15年だったろうとお察しいたします。私達会員が自信(チョッピリですが)を持って仕事に取り組めるのは、主軸である病図協があるからこそ感謝の気持ちで一杯です。今後ますます発展をするよう、私達地方の者もお役に立ちたいと思っています。

さて、私は第42回研修会で「滋賀県下の市立病院に於ける図書室の立場」と題して事例発表をいたしました。これは、県下5つの市民病院にアンケートを依頼し、それと病図協で実施した全国アンケートの中から他府県のいくつかの市立病院のデータを抽出して比較検討したものです。その結果、5つの県下市立病院では担当者が専任はおろか、兼務ともいえない状態で、別の仕事のほんの片手間に図書の仕事をしていることがわかりました。他府県では専任1名なのに、県下では0と、あまりの差に悲観したものです。また、図書室面積は他府県よりも広いのに蔵書が少なく、1人当りの図書予算も他府県100に対して、県下65というものでした。つまり、施設面での条件に恵まれながらも内容がないという矛盾した実態が明らかになったのです。